安藤政武さんへの追悼の辞

安藤政武氏が去る5月14日午後11時10分、拡張型心筋症のため東京・帝京大学付属病院にてお亡くなりになりました。1936年生まれ、享年57歳、東京都板橋区。早稲田大学卒業、日本協同組合学会等会員、協同総合研究所常任理事。故人はその生涯を生活協同組合運動にささげ、日本生活協同組合連合会の場で活躍されてきました。協同総研が設立されてからは地域経済論、協同組合セクター論、協同組合法制論等で研究会を組織され、生活協同組合の調査研究にも力を発揮され、研究所の調査研究の礎を築かれました。ここにご冥福をお祈りし、追悼の辞を載せさせていただきます。

夢多き野人　安藤君を悼む

勝部　欣一（日生協参与・ユーコープ顧問）

戸田葬祭場での葬式のとき実行委員長の森定君が「安藤君は運動の野人だった」と弔辞の中で語っていたが、まことに同感である。

全国消団連は1956年に主婦連、日生協、総評などで結成されたのであるが、主婦会館で開いた全国消費者大会で、急に立ち上がった安藤君が、主婦連を名指しで批難する演説をやり、大問題になって消団連の活動が一時ストップしたことがあった。

このことについて、安藤君は当時主婦連の事務局長であった勝部三枝子に会うたび毎に「あのときは申し訳ありませんでした」と何回も頭を下げる。これが20年ぐらいつづいたのが安藤君である。

日比谷公会堂で消費者大会をやるようになって、あらかじめ安藤君などの野次がでてくるのを押さえようと、議長団から来賓の野次はやらないようにと注意があっても、安藤君は学生運動できたえたあの大きく通る声で野次った。

とくに民社党の和田耕作さん（故人）への野次がいつも際立ったが、和田さんはフェビアン協会の人でもあり、いつも怒りながらもうまく応対しておられたことを思い出す。

生活問題研究所の常任理事だったころはよく色々な研究会を開いて、私たちも喜んで参加した。とくに福武直先生には彼の愛すべき点を愛され、一番面倒を見てもらったのではないか。

生活問題研究所を日生協の生協総研に変えるとき大きな問題のひとつは安藤君への評価と処遇であった。亡くなった福武先生にはほんとうに心労をかけたと思う。安藤君と一緒に私も福武先生にあやまりたい。

生問研の終わりの頃、早大の宮坂さんが中心で「協同組合の法制研究」を大勢でかなりやり、出版の一歩手前までいったが、出版先の不都合と生協総研への移行時期とで間に合わず、原稿のままとなってしまった。

この研究中に安藤君と一緒に山本秋さんを高井戸の浴風園に訪問して、かなり長時間生協法のいきさつを伺った。山本秋さんはそのとき「戦前の産業組合法のときから、別の生活組合法をもった方がよいと考えていた。戦後生協法を別につくることを主張したのは山本秋自身で占領軍の意志だけではない」ということを明言されたのである。

私は安藤君ともども、これを銘記しようと話していたが、この追悼の記にも印しておきたい。この「協同組合法制」の本ができなかったことは安藤君とともに悔やみたい。

生協組合員の意識調査をはじめ彼の調査熱心やそのアイデアは卓越したものであった。よくアイデアや企画をもちこまれて、宮坂さんらと一緒に「安藤君のアイデアはいいんだけど、何かハネあがっている」といつも皆で困ったものである。

最後に安藤君の手がけた「流通動向」も相当無理があり、ついに挫折することになったが、安藤節子夫人がやりくりして購読料の未発行分を講読者に返金されていたが、故人も最後まで節子さん

の世話になり心安まっていると思う。

野人安藤君、最後に君や大嶋君らと一緒に生んだ「市民ネットワーク情報センター」も生ゴミの嫌気性発酵運動や空ビンの規格統一などの静脈部分から始まり出した。君のホツホツととび出してくるようなものはまだないが、何とか進みそうだ。

君の生活運動への情熱を更に生かし続けたいと願うものである。

安藤政武君を悼む

杉本　時哉（全国労働金庫協会相談役）

私が労働金庫の現役から退いた時のことである。

「先輩！　そのうち先輩にやってもらう仕事をつくりますから……」

安藤君はそう言って私のことを気遣ってくれた。彼自身、日本生協連の現役として働く場を無くしていたのを知っていた私は、彼の人の良さには感心しながら、

「僕のことを心配してくれるのは有り難いけれど、君が期待するほどもう仕事熱心ではないよ、それより君の才能を生かした仕事を見つける方が先だよ」

こんな会話を交わした、私より若い安藤君が呆気なく病魔に倒れ、意識の戻らぬまま帰らぬ人となった。

最近、私は彼以外にも、その活動を期待して来た若い仲間を次々と失った。心から悔やまれ、寂しさを禁じえない。現世を精一杯生き続けて来た彼のあの世での冥福を祈っても所詮虚しくも思う。ともかく「私も精一杯生きることだ」と思うが、彼の無念さが思われて仕方がない。

安藤君とは早稲田大学の先輩・後輩の関係にある。しかし、学生時代を共有したことはない。彼が大学生協の現役として、消費者運動の第一線で活躍し始めたころに、早稲田生協のＯＢ会・生協稲門会で知り合ったのが最初ではなかったか？　何時の間にか、彼が「先輩！　先輩！」と人懐っこく話に来るようになり、私もその熱烈な語り口に感心もし、魅力も感じ、彼の結婚式にも確か参列させてもらった記憶がある。

先輩として奉られると、ついつい先輩振って苦言を呈することも無くはなかったが、終始彼はにこやかに、素直に謝ったり、かしこまってもくれるのだが、それでも論理の矛盾には容赦なく突っ込んで来る。弁舌さわやかという方ではないが、立て板に水のようにほとばしる彼の舌鋒の鋭さを経験された人は多いのではないか。そういう彼を愛してくれる人もまた多かったが、一部には誤解もされ恐れられたようにも思う。しかし、彼は人一倍思いやりがあり、同時に正義感が強かったのであろう。それだけ苦労も人一倍背負っていたのではないか？　最近の彼はそういう意味では、ずいぶんと丸味を帯びて来ていたように思う。

彼が労働者協同組合運動に関心を寄せ、その法制化課題に積極的に参加・協力していたのは知っていたが、私もまた、労働金庫の在任中から、この運動に心を寄せて来た。協同総合研究所の結成に当たって、彼も私も会員として参加させてもらい、彼と共通の土俵で接することになった。彼が常任理事として積極的・建設的な発言をして頑張っているのを、間近にみるようになった。

勝部さんや大嶋君と一緒に情報ネットワークの仕事を始めた時「これが彼の言っていた新しい仕事だな」と合点がいったが、生来不器用な癖にあらゆることに首を突っ込んでしまって収拾がつかない私の甘さを省みて、情報ネットワークには、とうとう参加しないままである。安藤君から発破をかけられそうだが、今のところは、協同組織金融分野で生きて来た己の任務に専念してみたい。安藤君の厚意に感謝しつつも、「許せよ」というしかない。

私ももう年金生活に入っている。安藤君ほど器用でも勉強家でもなく、ほどほどの生き方しか出来ないと思うが、彼に叱られないよう、ともかく協同に生きて来た人生を、私に残された命の有る限り、彼の生き様に習って誠実に、精一杯生きていこうと思う。

それが安藤君への供養になればと思っている。

安藤政武さんを追悼する

佐藤　誠（立命館大学助教授）

安藤さんに初めて会ったのは、確か私が大学1年の時だった。改めて数えてみれば四半世紀前になる。大学の同じ学部の立川君が、板橋の大学生協連の事務所にある研究所まで連れていってくれた。まだ研究所になっていなかったかもしれない。小さな事務所の一室で話をした。外出していた安藤さんが戻るまで応対してくれた職員が「安藤さんね、結婚するらしいですよ。これ内緒だけど」と言ったことを覚えている。後に、その結婚相手の節子夫人の会社でお世話になるとは、思いもつかなかった。安藤さんに会ったのは、その指導で勉強したいという立川君の誘いによるもので、すでに彼は将来、生協で働きたいと決意していたようだった。二人とも大学の生協の総代だったが、私の方はまったくの偶然でクラス総代に選ばれたから関わっただけで、かなりいい加減だった。就職も、迷ったあげく新聞記者の道を選んだ。従って、大学時代に個人的に安藤さんと深いお付き合いをしたことはない。ただ、就職が決まった時は立川君と私を誘ってお祝いをしてくれた。

新聞記者を8年余りで辞め、イギリスの大学で再び学びはじめたある日、ＢＢＣのテレビを観ていたら、スペインのある町で住民が協同組合をつくり、工場、学校、生協、社会保障機関と、地域自立に成功した例が紹介されている。モンドラゴンとの出会いだった。番組のプロデューサーに手紙を書いたら、当時はまだ数少ない文献を教えてくれた。大学のかたわら独習するなかで、ますます引き付けられ、なんとか日本に紹介できないものかと考えた。立川君に手紙を書いたら、安藤さんに相談したらしい。翻訳は難しいが、易しく書き下ろしたものなら、生活問題研究所の機関誌に載せてもよいという。結局、1年以上にわたって連載させてもらった。

アフリカで半年ほどフィールド・リサーチをしたら、貯金も借りた金もなくなり、研究を中断して日本でしばらく働かざるをえなくなった。今度も安藤さんが助け船を出してくれた。節子夫人が専務を努める出版社の仕事を手伝わないかという。結局、1年間、働かせていただくことになった。モンドラゴンについても、ほかの執筆者を加えたうえ私が編者という形で本にするお膳立てを安藤さんはしてくれた。『協同組合の拓く町』というタイトルは、安藤さん、立川君、私の3人で決めた。拓く、というキーワードを提案したのは立川君である。当時の安藤さんは労働者協同組合についてまだ疑問をもっていたらしいが、新しいもの、若い者のチャレンジに対する感覚は鋭かった。

ある事情から、私はジャーナリストとしてアフリカに滞在したため、何かそれらしい仕事を論文とは別に仕上げる義務を感じていた。これも、安藤さんの口利きと出版社の三上社長の助力で仕上げることができた。安藤さんは、いずれの仕事についても徹底的に誉めるという形で私を励ましてくれた。出版祝いの席で「佐藤君は、かの大新聞・・・を一番の成績で入社され」と言ったので「成績などわからない」と抗議したところ、次に似たような場が開かれたおり「佐藤君は、・・・を2番の成績で」と変更した。

イギリスで博士論文を完成させ、日本に再びもどってからは京都の大学での仕事が始まったため、安藤さんと顔をあわせるのは年に何回か研究会などが開かれるおりだけになってしまった。安藤さんが倒れて意識不明になったという知らせは、スペインのマドリッドで暮らしていたとき、立川君の手紙で知った。

安藤さんとは何度か喧嘩もしている。原因はおおむね安藤さんが企画するさまざまな出版とか論文とかの仕事について、私が知らない、できないと断ることに端を発していた。しかし、数か月ののち、気が付くとまた飲み屋で席を挟んでいた。安藤さんとはいろいろ考え方を異にする点もあったが、私のことを常に認めて評価する形で教育してくれた。私自身が大学で教育者の端くれになってみて、秀れた教育者としての安藤さんの恩恵を受けたことを感じるのである。